

放送人の会

BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION

No.7. 2001. 1. 20

放送人の会 会報

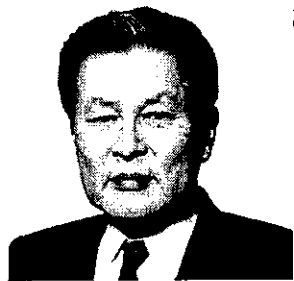
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町1-1

千代田放送会館3階

電話・FAX (03) 3221-0019

E-mail <info@hosojin.com>

がんばれ 放送人!



名誉会長
川口 幹夫

地上波が出て、BSとCSが出て、更に今度はBSデジタルです。正に「アンテナは花ざかり」です。めでたい、めでたいといって、浮かれているのか。ちょっと立ちどまって、足下を見る必要があります。

この花ざかりを、「仇花の花ざかり」にしてはなりません。といって私は、「メディアの住み分け」をせよ、とか、「多様な多彩な番組を出して国民一人一人が自分の波をもつようにせよ」などというつもりはありません。

所詮、テレビもラジオも、マスを相手のメディアであり、そのスタンスの上に立たざるを得ない、と思うからです。

では何が必要か？ 一人一人の放送人の中に放送に対する情熱と、違った個性の面白さを維持しつづけてほしいのです。

商売勿論大事です。視聴率も軽視してはいけません。だが何より大事なものは、放送人のひとりひとりが「自分たちが放送の創り手である」と自覚することです。

がんばって下さい。強く自己を主張して下さい。それが放送人の会の目的です。

委員会報告

総務委員長

野崎 茂

月一回、総務委員会の会合を開いている。そこで議論を重ねているうちに、月例の「小研究会」を持つという事になった。なぜ小研究会なのか。おカネをかけない、出席者は小人数でいい、という割り切りの表現として、あえて小を冠しただけである。

わが会の現有勢力でいうと、「放送人の証言」や「研究シリーズ」放送人の世界」さらには先日のクロストーク(三回)のようなイベント事業で活動資金は目いっぱい。余裕はない。それでも日常活動の一つとして研究会を敢行したい。で、小研究会とあいなった。

研究会を自認する小生最後の研究会になるかもしれない、という予感がする。それはともかく、第一回小研究会の報告者は小生。

すでにご案内したように「公的映像アーカイブの構築」というテーマ。放送事業社が業務用につくっているインナーライブラリーを、国立国会図書館映像アーカイブシステムの一部に組みこむ案。デジタル時代、分散管理で十分という考え方である。

第二回以降は、映像作家・演出家の著作権上の権利問題、多チャンネル時代に見合う放送の新しい概念づくり、その他のテーマが続く予定。外部参加も歓迎したい。

事業委員長

今野 勉

平成十二年度、事業委員会は、次のような事業を、十二月までに行いました。

①「放送人の証言」収録活動。担当久野浩平幹事。これまでの収録証言。

・辻好雄・作本秀信・高橋太郎
・岡本愛彦・西沢実・吉村繁雄・藤倉修一・長沢泰次・北川信・浅田孝彦・八橋卓・関谷則・秦豊・島地純
②Inter BEE公開シンポジウム。担当斎明寺以致子幹事。十一月十六日。

パネラー 鶴橋康夫(読売テレビ・会員)、星田良子(共同テレビ)、大友啓史(NHK)、コーディネーター石橋冠(元NTV 司会・会員)

③カレント・シンポジウム「テレビ人と本音で語る」十二月三日(日)、十日(日)、十七日(日)。

第一回、ゲスト・武藤旬(週刊文春)、大山勝美(会員)、司会・澤田隆治(同)。第二回、ゲスト・五味一男(NTV)、坂本衛(ジャーナリスト)司会・今野勉(会員)。第三回、ゲスト・小林亜屋(作曲家)、司会・野崎茂(会員)。

会場はTEPCO銀座館。共催文化フォーラム。最終回には川口幹夫名誉会長も参加。

毎回満席(百人前後)で盛会であった。今後の予定として、研究シリーズ「放送人の世界」予告欄にて紹介。

今年度の「研究シリーズ・放送人の世界・人と作品」は、次のように企画しております。

☆主題 昭和四十年代のテレビ・笑いの研究

☆共催 放送番組センター(放送ライブラリー)

☆日時 平成十三年二月十八日(日)、同二十五日(日)、三月四日(日)、同十一日(日)各回、午後一時半より

☆場所 放送ライブラリー(横浜市、横浜情報文化センター内)

☆内容 二月十八日(日)、同二十五日(日)、「シャボン玉ホリデイ」「ゲバゲバ九〇分」等(予定)

バラエティ番組の原点にたつて
企画進行 今野 勉

ゲスト・斎藤太朗(NTVプロデューサー)

三月四日(日)、三月十一日(日)、「てなもんや三度笠」「スチャカ社員」等(予定)

今回、はじめて放送番組センターと共催することになりました。以降も、放送番組センターと共催という形で研究シリーズを続けていく方針です。

会場は、横浜市の放送ライブラリー内になります。足の便もよいので、会員の皆様にはぜひお運びいただきたいと思っております。詳細はあらためてお知らせします。

「放送」について語り、議論し、研究すべき問題は山積みし、状況は流動するから、急がねばならないのだ。

21世紀に

代表幹事

大山 勝美

『何様のつもりテレビ局』(週刊文春)は刺激的な連載で、最後は「これは全民放への挑戦状である」と結んであった。しばらく様子を見ていたけれど、放送関係者からの正面切ったの反論・異論はなかった。このままだと、一般の人は「やはり文春の指摘通りでテレビの人は何も言えないのだ」と誤解してしまわないか。そんな思いから、三週連続の公開シンポジウム「放送人と本音で語る」を文化パスターの協力をえて銀座テプロ館で行った。三回とも議論はつきず、会場はほぼ満員で成功だったと思う。

週刊文春の武藤旬氏も事実誤認や調査不足を認めていたが、「何様のつもりテレビ局」は統編を計画中とも予告した。田原茂行氏が発言していたように「いま放送を他メディアの人を語る」とは意義があるので、挑発は大いに歓迎するところだ。

会報の編集長を松尾羊一氏が快諾されたことは喜ばしいニュースである。ことしは、番組センターとの共催で「放送番組ライブラリー」を使ってもっと若い人や地域の放送人をまきこむ企画を実施すること、会員をふやすことなど、課題はつきないものの、「放送人の会」は、二十一世紀たしかに実績を積み重ね、その存在をアピールしつつある。なにしろ、「放送」について語り、議論し、研究すべき問題は山積みし、状況は流動するから、急がねばならないのだ。

テレビ人と本音で語る

澤田 隆治

「テレビ人と本音で語る」視聴者と放送人のクロストーク」の第一日は平成12年の11月12日、銀座のテプロスペースで開催された。

『週刊文春』に6週にわたって連載され「連続追及キャンペーン 何サマなのかテレビ局」を書いた武藤旬さんがゲストスピーカーということもあって、ほぼ満員の客席には何か起こりそうな期待感が満ち溢れていた。

この記事を書くまではテレビ局の取材をしたことがなかったという武藤さんは、平成12年の5月から7月にかけてテレビ界を取材、この連載の執筆をしたのだという。大山勝美、ペネラー、かつて在籍したTBSの体験から、制作費の問題についてテレビ局の番組編成のあり方から説明するなど、武藤さんの記事の誤解をテレビ局の立場から指摘したり、視聴率偏重の番組づくりについて解説をした。会場からの活発な質問や意見の間に、大橋巨泉さんの最近のバラエティ番組づくりがよくない方向へ向いていて「ボ

はとくに諦めています」という意見を披露したり、女優の岸恵子さんのメッセージを紹介した。会場からかなり専門的な意見をぶつけてくる方がいたり、放送のシステムやテレビ局についての初歩的な誤解に基づく発言をされる方もいたりしたが、総じて活力にあふれたシンポジウムで、テレビメディアの持つ多様性がよくわかると同時に多チャンネル時代の視聴者と放送人の関係がもっと薄くなっていくのを予感させたから、こうしたシンポジウムの必要性を強く感じさせたものだった。

今野 勉

第2回のゲストは、日本テレビのプロデューサー五味一男さんとジャーナリストの坂本衛さん。

五味さんは「クイズ・世界はSH OW・BY ショーバイン』『マジカル頭脳パワー』などのプロデューサーとしての体験から、ふつうの人が癒される番組、ふつうの主婦が楽しめる番組を、世界でいちばん優しい、いちばんふつうの目で、作ってきたし、作っている、と話した。

坂本さんは、最近の青少年の犯罪などが、あたかもテレビの影響だという風潮が蔓延しているが、テレビはむしろ青少年に良い影響を及ぼしている面がずっと多いのではないかと主張し、一九八〇年代よりも青少年の凶悪犯罪は減っていると指摘した。

また、視聴率主義のどこが悪いのか、今、見られることが大事なのだと主張した。

テレビ局に対しては、視聴者からの電話がほとんどつながらない現状に対して改善を要求した。

参加者からは、高齢の母親と一緒にテレビを見ているが、展開が早すぎて、母はついていけない、もっと高齢者にやさしい作り方はできないのか、同じ時間帯に同じような番組が並ぶのは、談合のようにみえる、といった意見や、BBCの会長の「アメリカのテレビ番組が金という船に乗って泥水のようにヨーロッパ文化に逆流してきている」という言葉を引いて、テレビ文化のあるべき姿を問う意見も出た。

野崎 茂

シンから怒っている、憂えている、小林亜星さんは——と実感させた亜星さんの語り口だった。

オープニングでも途中で、亜星さんは何度となく、いい番組はたくさんある、長いこと仕事をしてきたテレビに愛着があると断りながら、でも深夜民放バラエティ番組のだからしない番組づくりを告発した。告発のキーワードは拝金主義である。

番組の自身がどんなにくだらなくたって、かまわない。視聴率をかせぎ、CM枠が高く売ればいいという経営姿勢を、亜星さんは拝金主義とよぶ。そして、ひどい、くだらない、品のない、見識のかけらもない番組に対して、テレビ局に抗議しよう。スポンサーの商品は買わない運動を起そうと亜星さんは呼びかけた。

視聴者の質問に答えながら、亜星さんの怒りはさらにエスカレートしてゆく。テレビ局は、芸のない若者のナンセンス番組を下請けにつくらせ、自分だけ儲け、文化を生みだす者としてのプライドがない。音楽にかんして将来は著作権使用料の制度がなくなるんじゃないかと、大胆な見通しをのべた。著作権がらみで和田勉さんが怒りの発言。一人の青年がある番組をみて感動したと話すと、和田さんはオンエア後の番組を見ることのできない実情を指摘。

他メディアでは古い作品・情報にアクセス可能なのに、テレビでは不可能というメディア差別を告発した。全体としてこうした会合をくりかえしてゆく必要を感じた。

InterBE 2000 公開シンポジウム 第3回

「ミレニアムの放送」

私が創るドラマ

齋明寺 以玖子

*パネラー

「二〇〇〇年・秋」

鶴橋康夫氏

「今日の自分」

星田良子氏

「リアリティの捉え方とドラマ制作について」

大友啓史氏

まず鶴橋氏は「裸をお見せしよう」と度肝を抜き、八〇年代の二作品の見事な圧縮版に出演諸優の鶴橋評と演出中の氏の横顔をもちりばめた快作『鶴橋賛歌』を提示。衝撃的映像美と巧みな話術に、会場は笑いに包まれながら、衣服を剥ぎ取った人間の深層心理に迫るドラマ作法はとりもなおさず演出者自身が裸に裸にならなければならないこと、そこに虚構から真実の生まれる迫力と究極の美に到る秘密があることを納得させられた。

続く星田良子氏は、デジタル化時代にこそ「よりアナログに、常に人間のドキュメントに、こよなく人間が人間であることに、こだわりたい」と、制作会社所属女性演出家の誇りと自信を、悩みと反省も交えつつ、『殺意の涯で』他の映像を引用して一発勝負に賭ける熱い思いを語り、最後に、三十四歳・加大留学帰りの大友啓史氏が、当時放送中の『深く潜れ』を主体に、ドラマにおけるリアリティを求めて題材、配役、手法、機材の各面での実験冒険を重ねる中からあの新鮮な若者をも虜にする作品が仕上がる過程を示し感銘を与えた。

司会・石橋冠。

コラム

RKB毎日放送

木村栄文

キー局で作られるバラエティ番組への「低俗、卑猥、暴力的」といった類いの批判は、それが「こもったもな」原則論であるため、放送人の多くはこれを軽視、もしくは無視してきた。

ところが、少年犯罪の激増と凶悪化を背景に、政府、自民党の「暴力表現や性描写の抑制・禁止」を法制化しようという、国家検閲への道に、民放自らが迷い込んでしまった。

保守党も民主党も世論が怖く、法案反対には回れない。「有害の恐れ」なんて烙印は、官僚の論法でどうにでも捺せる。ひるがえって、ローカルの現場に

は忸怩たるものがある。ローカルの深夜番組には、タレントとセットと照明が足りないが、笑いが寒々として、なかなか笑いのていをなさない。それでも上向きの視聴率を心の支えに、若手は仕事に励んでいる。

次はきつとワイドショーの芸能人のスキヤンダルコーナーが槍玉に挙げられよう。

「あな嬉し 隣の蔵が売られゆく」リポーターが嬉しさを噛み殺し、ひそやかな調子で、見て来たように事件の解説をする。

ひとの不幸は蜜の味、「信じられないほど残忍な少年の事件」を、彼らは浮き浮きと歩きながら、カメラ目線で語り続ける。二十年、一日のように。

デジタル化とローカル局

山口放送常務取締役

テレビ制作局長 磯野恭子

日本中がバブル景気に沸いていた頃、テレビ界も華やかなりし頃、不況の波にもまれた地方局は、いまだ地上波放送のデジタル化に取組む上で大いに危機感を抱いている。

これまでのローカル局はキー局から流される情報を地元で伝えるという中継局的な役割が八割近くあったが、今後はキー局に全てを依存するのではなく、地方局自らが番組を作りそれをスポンサーに売る必要に迫られる。制作力と営業力が問われる。

これからは条例を越えたローカル局同士の提携、制度を増やしていくことになろう。キー局の絆もやや緩やかなものになり、ローカル局が自立していくことをむしろ奨励するだろう。

う。

デジタル化になれば三チャンネルを各局が埋めなければならぬ。このサバイバルを生き抜くためには先ずスリムで体力のある組織づくり、コストを抑えつつ人材を活用することだ。第二に地域主義に徹することだ。地域ジャーナリズムの役割として、地方分権、医療、福祉、教育、環境、農業といった全国規模の課題を地域と連動したキャンペーン番組こそローカル局の強力な武器となるだろう。グローバルスタンダードをめぐるローカルの視点を大切にしたい。

あとがき

次号(4月発行予定)から会報は広報委員会のなかに会報編集委員制を設け、松尾羊一・伊藤雅浩(元「TBS 調査情報」編集長)の担当になります。よろしくご協力お願いします。